
抱きしめて下さい。

美花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

抱きしめて下さい。

【Nコード】

N3440E

【作者名】

美花

【あらすじ】

私の過去です。この話は、自分自身を見つめなおし、過去を見つめなおし、そして自分を最初から育てなおす為に書きます。初めての連載小説なので読みにくいとは存じますが、どうかご了承下さい。＊批判、中傷などは悲しくなるのでご遠慮ください。＊こういう所を読みやすくしてなどのご要望がありましたら、出来るだけ考慮しますでおっしゃって下さい。＊過去にトラウマがある方はフラッシュバックの可能性があります、ご注意ください。

足音（前書き）

私はただ、抱きしめてほしただけだった。

足音

私は自分の部屋でベッドに横になって天井を見上げている。

天井はシミひとつない。

なにか面白いものが貼り付けてあるわけでもない。

それでも私はただボーッと眺めてた。

頭は空っぽだった。

でも、耳だけは神経を尖らせていた。

『ガチャッ！』

静かだった家に、玄関から突然その音が鳴り響く。

人形のような私の体が、一瞬小さく跳ねる。

帰ってきたのは母だろうか、

それとも悪魔だろうか。

靴を脱ぐ音。

ドスツドスツという乱暴な足音。

階段を上がる音。

一つ一つの音が私を恐怖に震えあがらせた。

あいつが、帰ってきた。

私がゆっくり窓の外に目を向けると、小さな鳥が木の枝にとまっている。

とても平和な絵だった。

『ガチャ』

そんな私の後ろで、部屋の扉が開かれた。

扉のノブに手をかけたまま立ち止まっている、その人に目を向けた。

紺色のセーラー服に、長めのスカート。

踝までの白いソックス。

天然パーマでアチコチに毛が飛んでいるショートヘア。

大人しそうで地味なその服装が、私に絶望と恐怖を植え付けた。

私の6つ上の姉が、そこに立っていた。

お互い、無言だった。

姉の目は黒く虚ろで、私を見ているようで違う何かを見ているようだった。

私もベッドに座りなおし、多分虚ろな目で姉を見つめていた。

姉が、一歩、

こちらに歩を進めた。

『きた』と思った。

姉が一步一步、踏みしめるように私へ歩いてくるたびに、
私の体は縮こまった。

(ごめんなさい、ごめんなさい、許して、やめて下さい)

私はバカみたいに頭で願った。

その小さい足音でさえも、私にとっては最大級の恐怖だった。

姉は私のすぐ前まで来ると、下を向いて動かない私の髪の毛を掴み、もう一方の手を振り上げた。

全てがスローに見えた。

頭の中がなんだか熱くなり、これから来る痛みに備えているようだった。

私は弱々しく手で頭を守ったが、あまり意味は無かった。

「ガッンッ!!」

頭の中で、音がした気がした。

私は実の姉から虐待を受けていた。

笑顔のあふれる家族

家族がおかしくなってしまう前、私は毎日毎日、笑顔が耐えることが無かった。

世界は光に溢れていて、

膨らむ好奇心には逆らえず、

公園や山を友達と一緒に駆けずりまわっていた。

夕方になって、心地良い疲労とオレンジの光に包まれながら家に戻ると、

お母さんが『おかえり』と声をかけ飲み物を差し出してくれる。

そして、晩御飯の準備をするお母さんの後ろをチヨロチヨロとついてまわりながら、嬉々として今日の出来事を喋りまくった。

お母さんは『ふんふん』と聞き流していたけれど、それでも幸せだった。

それからしばらくすると、

6つ離れている一番上の姉、マリ（仮）と4つ離れている二番目の姉、カナコ（仮）が学校から帰ってくる。

私はすぐ一番上のマリお姉ちゃんの元へ走りよった。

優しくて、面白くて、私の頭を撫でてくれるマリお姉ちゃんが私は大好きだった。

真ん中のカナコお姉ちゃんも大好きだったが、一番はマリお姉ちゃんだった。

『お姉ちゃん、お姉ちゃん』と付いてまわって、母にした話をマリお姉ちゃんに話して聞かせた。

マリお姉ちゃんが笑顔で返してくれるたび、私の心はポカポカと温まった。

6時半ごろになると、お父さんが帰ってくる。

お父さんは、目尻が垂れていて、笑うと目がなくなる。

お父さんは私の事をとても可愛がってくれて、公園や遊園地によく連れていってくれた。

だから私はお父さんも好きだった。

お父さんが帰ってくると、ごはんよりも先にまず一番風呂に入り、その間に料理を作りおえて

お父さんがお風呂から上がったたらやつと皆で食卓に集まり、一家団欒をした。

我が家の食卓では、笑いが絶えず、たくさん話しながら食べているとテーブルいっぱいに置かれていた晩御飯は一気に無くなった。

お母さんはとても料理が上手かった。

私は、この晩御飯の時間が世界で一番好きだった。

晩御飯の後、

お父さんはお酒を片手にテレビ鑑賞。

マリお姉ちゃんは二階の自分の部屋で、絵を書いていた。

マリお姉ちゃんの夢は漫画家だった。

私はお母さんとカナコお姉ちゃんと一緒にお風呂の時間。

私はお湯が顔にかかったりするお風呂が少し苦手だった。

早く来なさい！ときつく言われてやっと渋々向かった。

でも湯船につかるのは好きで、いつも心地良い表情を浮かべながらつかっていた。

カナコお姉ちゃんとお母さんはそんな私を見て、年寄りくさいとよく笑っていた。

私はいつもお母さんと、布団を二枚ひいて同じ部屋で眠っていた。

寂しがりで甘えん坊だった私は、左隣のお母さんの右手をギュッと掴んで、両手で抱えるようにして眠っていた。

お母さんの手からは、ハンドクリームの優しい良い匂いがして、その香りが私をととても落ち着かせた。

とてもとても、幸せだった。

初恋

私が小学校4年生ぐらいの頃、好きな人ができた。

できたと言うより、自覚した感じだった。

相手は近所に住む幼馴染みの男の子。

よく二人で遊びにいたり、色んな探検をしたりしていた。

学校にいる時も一緒に遊んで、終わると一緒に帰って、カバンを自分ちの玄関に放りなげるとすぐに出ていった。

近所の子供たちの溜まり場になっている男の子の家に行くと、幼馴染みの男の子も必ずいた。

毎日のようにその溜まり場になってる男の子の家で遊び、近くの公園でも遊び、まるで男の子のようだった。

私は心もまるっきり男の子そのもので、サバサバした性格をしていた。

だから彼らも仲間として認めてくれたのかもしれない。

小学校低学年ごろから、私と好きな人と溜まり場の男の子の三人で塾に通いはじめた。

塾の場所は近所だったので、三人で自転車を走らせながら一緒に通っていた。

ある日、お母さんに髪を少し多めに切られた事があった。

髪の毛を切られることが嫌いだった私は、その日はすごく不機嫌に自転車をこいでいた。

それを見かねた好きな人は、『かわいいやん』と言ってくれた。

自分は

「女の子」というより

「近所の男友達」のように見られていると思っていたので、とても

驚いた。

でも心が暖かくなって、私は何も言わずに笑顔で返した。

髪の毛のことなんてどうでもよくなった。

そんな、普通の女の子だった。

新しい家族

小学4年生ぐらいになった頃、家の前で近所の野良猫が子猫を生んだ。

白と灰のとても綺麗な母猫で、人懐っこい猫だった。

今思うと捨て猫だったのかもしれない。

子猫もみんな可愛かった。

五匹中、三匹はトラ猫で一匹は真っ白な猫で、もう一匹唯一の女の子は三毛猫だった。

子猫たちが少し大きくなって目もひらいた頃、うちの家は、唯一の女の子の三毛猫をもらった。

とても可愛くて、小さくて、ヤンチャな子猫だった。

私はとてもかいがいしく世話をやいて、何も用事がなければ頭やら体をずっと撫でてやっていた。

子猫の名前は

「ミイちゃん」と名付けられた。

ミイちゃんは家族の中で私に一番なついてくれた。

ミイちゃんがいてくれたからこそ辛い日々も耐えられた。

悲しい事があってもミイちゃんがすぐ慰めてくれた。

のちにミィちゃんは私の中で一番大きな存在となった。

今私が生きているのは、ミィちゃんのおかげと言っても間違いではないと思う。

他の猫たちは、家族や近所の人で貰い手を探したのだが、トラ猫が一匹貰われていっただけだった。

真っ白な子猫は生まれて間もなく、体が弱かったのか乳を飲む前に死んでしまった。

母猫とトラ猫2匹は、車で行く何キロも離れた公園に捨てられた。

私は何も逆らえなかった。

「この世界は不平等だ」と、その時子供だった私は学んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3440e/>

抱きしめて下さい。

2010年10月25日22時26分発行